

綱島の洪水ものがたり

きたつなしましょうがっこう がっく むかし 北綱島小学校の学区の昔は、ほとんどが田んぼで、米作りができるとともに、鶴見川、早渕川の洪水に苦しんで
きました。桃畑などがふえた時代、住宅がふえる時代となり、洪水をふせぐ人々の努力が続きました。

その努力の結果、1982年の洪水を最後に、洪水がない生活ができるようになりました。

北綱島小学校に学ぶみなさんが、昔からの洪水をふせぐ人々のものがたりを知り、生活科、総合的な学習の
時間、道徳、社会科、理科などで深く広く学ぶ手がかりとなることを願って、このお話を短くまとめました。

2022年10月

横浜市立北綱島小学校 元校長(第10代) 鷺山龍太郎

● 昔の綱島の洪水

江戸時代、綱島は、鶴見川と早渕川が出会う場所で、豊かな水と田んぼになる低い土地があり、お米づくりにはよい土地でした。

しかし、「早渕川は、カエルがしょんべんしても洪水になる。」と言われて、雨がふると洪水になりやすい場所でした。

そのため、「綱島や新羽には嫁にやるな。」という言葉も残っています。

さむらいの時代、ここは徳川将軍の土地でしたが、洪水が多く、人々は苦しみました。綱島駅に近くで今でも桃づくりをされている池谷さんのご先祖は、苦しむ綱島の人々を代表して、老中様のかごに手紙をさしだし、洪水をしずめる工事のおねがいをしたと伝えられています。

このような、うったえ(駕籠訴)をすると死罪などになることもあったのですが、ゆるされ、工事のための少しのお金をいただくことができました。

将軍からのお金をもとにみんなで工事をすることはできましたが、洪水の被害をへらすほどの大工事はできませんでした。

大きな洪水があると、綱島は湖のようになってしまい、何日も水がひくことがありませんでした。せつかく実ったお米も、何日か水にひたったままだと、芽が出てしまうのです。

飯田さんの長屋門には、洪水のときに使ったとされる舟があるので、みなさんも見せていただきましょう。



1958年狩野川台風でのようす(鶴見区)
「暴れ川の記憶」表紙から引用



江戸時代の台風被害の様子
安政3年(1858)江戸の被害 安政風聞集



飯田家住宅の長屋門にある和船
14代当主 飯田助知先生が紹介 2022年撮影

● 新しい時代の工夫 ～桃の里と長屋門前水作りの池のひみつ～



さむらいの時代が終わり、新しい時代になりましたが、洪水は続きました。

人々は、洪水の多い綱島の土に合い、台風の

季節より前にとれる、「日月桃」と言う品種のおいしい桃を育てるようになり、「東の

神奈川、西の岡山」と言われるほどの桃の名産地になりました。また、冬には飯田さん

の長屋門の前の池で氷も作られ、夏には町で売れ

るものになりました。昔の冬は、今より寒く、長屋門

の前の池で厚い氷を作ることができたのです。

北綱島小正門近くの「遊学の碑」
女の子が桃をかかえている

太平洋戦争の前(1938年)にも大きな洪水があり、飯田助夫衆議院議員は、横浜市長や国の大臣をよんで、綱島橋から湖のようになった綱島を見てもらいました。大臣たちも、何とかしたいと言って帰ったのですが、戦争が始まり、それどころではなくなりました。

戦争の間に、「ぜいたく品の桃より米や麦を作れ。」という軍の命令もあり、戦後は、温泉街や住宅地になって桃畑は少なくなっていました。



太平洋戦争前1938年の洪水 大倉山付近

●鶴見川の「流域」で協力して洪水をふせぐ【鶴見川総合治水対策】

戦争が終わり、鶴見川のまわりには、家や工場がふえ、多くの人々が生活するようになりました。このように町が変わったのに洪水がふせげなかったため、狩野川台風(1958年)では、何万件もの家が浸水しました。

降った雨が川に集まる地域を「流域」といいます。鶴見川流域で県や市の境を越えて、鶴見川の上流から下流まで多くの役所と市民、学者が知恵と心と合わせて大作戦を考え、1980年ごろから始めました。

作戦1【河川対策】 早渕川や鶴見川は曲がっていた川をまっすぐにして、広く深く掘りました。その土砂で埋め立てられたのが大黒ふ頭です。

新横浜のスタジアムのあたりには、洪水をふせぐためにたくさんの水をためる場所(多目的遊水地)ができました。

作戦2【下水道対策】 地下の巨大な管に雨水を大量にため、町に降ってたまった雨水や下水からあふれる水(内水)を出すためにポンプ場が働くしくみも作られています。

作戦3【流域対策】 雨水が一度に川に集まらないように、鯛ヶ崎公園の広場には水をためるしくみがありますので、見てみましょう。こうしたしくみは、学校の校庭やマンションの地下など、町田市から鶴見区まで、5000箇所も作られていて、雨水をためて洪水を防ぎます。

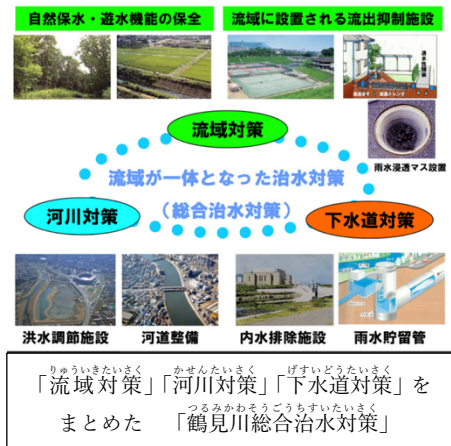
綱島市民の森などは、木の根と土が水をため、雨水が一度に川に集まらないようにします。鶴見川流域には、水源の町田市から横浜市まで、たくさんの森が市民の努力により守られているのです。

こうして、「河川対策」「下水道対策」「流域対策」を合体させて、【鶴見川総合治水対策】が行われました。その結果、1982年の洪水を最後に、大きな洪水は起きなくなりました。(2022年10月現在)

2019年の台風19号では、となりの多摩川で洪水がありましたが、鶴見川は、新横浜の多目的遊水地が水をたくわえ、町への洪水が起きませんでした。こうして、鶴見川総合治水対策は、全国の手本となったのです。

●これまでなかったような大洪水にそなえる

今、地球温暖化により、これまでになかったような大洪水が世界中で起きるようになりました。「港北区洪水ハザードマップ」では、北綱島小学区は、最大で3m、2階までの浸水も予想されています。「港北区洪水ハザードマップ」や北綱島小学校地域防災拠点運営委員会の「水害・土砂災害の避難について」などをもとに、わが家の守りたいもののために、自分と家族が早めに動き始める「マイ・タイムライン」などを考え、命と大切なものを守るそなえをしていくことが必要です。



参考文献 鶴見川水害予防組合史増補復刻版(2022年度版) 岸 由二「生きのびるための流域思考」ちくまプリマー新書 港北区史 綱島小学校社会科資料「あばれ鶴見川にいどむ」 飯田助知様のお話 池谷様のお話
この文章は、2013年当時の校長鷲山が飯田助知先生にご監修いただいて書いた教材、「綱島洪水とたたかい」がもとになります。(ホームページで検索できます) この教材をどの学年でも使えるように、短くまとめたいと思いました。
飯田助知先生からいただいた「鶴見川水害予防組合史増補復刻版(2022年度版)」と、鶴見川流域ネットワーク代表理事 岸 由二先生の本とお話をもとに、洪水の歴史と新たに「鶴見川相当治水対策」を紹介してまとめました。 鷲山